



分離派の建築的背景 ゼムパーからヴァーグナーへ

分離派100年研究会第1回シンポジウム
東京大学20161030
河田智成 (広島工業大学)

分離派の背景:ゼムパー/ヴァーグナー/分離派建築会

年次	ゼムパー関係	ヴァーグナー関係	分離派建築会関係
1910	ゼムパー建築		
1911	1910年刊『建築』		
1912	イノコチヤ・ヨシタツ建築設計へ		
1913	『新建築』創刊		
1914	『新建築』創刊		
1915	『新建築』創刊		
1916	『新建築』創刊		
1917	『新建築』創刊		
1918	『新建築』創刊		
1919	『新建築』創刊		
1920	『新建築』創刊		
1921	『新建築』創刊		
1922	『新建築』創刊		
1923	『新建築』創刊		
1924	『新建築』創刊		
1925	『新建築』創刊		
1926	『新建築』創刊		
1927	『新建築』創刊		
1928	『新建築』創刊		
1929	『新建築』創刊		
1930	『新建築』創刊		
1931	『新建築』創刊		
1932	『新建築』創刊		
1933	『新建築』創刊		
1934	『新建築』創刊		
1935	『新建築』創刊		
1936	『新建築』創刊		
1937	『新建築』創刊		
1938	『新建築』創刊		
1939	『新建築』創刊		
1940	『新建築』創刊		
1941	『新建築』創刊		
1942	『新建築』創刊		
1943	『新建築』創刊		
1944	『新建築』創刊		
1945	『新建築』創刊		
1946	『新建築』創刊		
1947	『新建築』創刊		
1948	『新建築』創刊		
1949	『新建築』創刊		
1950	『新建築』創刊		
1951	『新建築』創刊		
1952	『新建築』創刊		
1953	『新建築』創刊		
1954	『新建築』創刊		
1955	『新建築』創刊		
1956	『新建築』創刊		
1957	『新建築』創刊		
1958	『新建築』創刊		
1959	『新建築』創刊		
1960	『新建築』創刊		
1961	『新建築』創刊		
1962	『新建築』創刊		
1963	『新建築』創刊		
1964	『新建築』創刊		
1965	『新建築』創刊		
1966	『新建築』創刊		
1967	『新建築』創刊		
1968	『新建築』創刊		
1969	『新建築』創刊		
1970	『新建築』創刊		
1971	『新建築』創刊		
1972	『新建築』創刊		
1973	『新建築』創刊		
1974	『新建築』創刊		
1975	『新建築』創刊		
1976	『新建築』創刊		
1977	『新建築』創刊		
1978	『新建築』創刊		
1979	『新建築』創刊		
1980	『新建築』創刊		
1981	『新建築』創刊		
1982	『新建築』創刊		
1983	『新建築』創刊		
1984	『新建築』創刊		
1985	『新建築』創刊		
1986	『新建築』創刊		
1987	『新建築』創刊		
1988	『新建築』創刊		
1989	『新建築』創刊		
1990	『新建築』創刊		
1991	『新建築』創刊		
1992	『新建築』創刊		
1993	『新建築』創刊		
1994	『新建築』創刊		
1995	『新建築』創刊		
1996	『新建築』創刊		
1997	『新建築』創刊		
1998	『新建築』創刊		
1999	『新建築』創刊		
2000	『新建築』創刊		
2001	『新建築』創刊		
2002	『新建築』創刊		
2003	『新建築』創刊		
2004	『新建築』創刊		
2005	『新建築』創刊		
2006	『新建築』創刊		
2007	『新建築』創刊		
2008	『新建築』創刊		
2009	『新建築』創刊		
2010	『新建築』創刊		
2011	『新建築』創刊		
2012	『新建築』創刊		
2013	『新建築』創刊		
2014	『新建築』創刊		
2015	『新建築』創刊		
2016	『新建築』創刊		
2017	『新建築』創刊		
2018	『新建築』創刊		
2019	『新建築』創刊		
2020	『新建築』創刊		
2021	『新建築』創刊		
2022	『新建築』創刊		
2023	『新建築』創刊		
2024	『新建築』創刊		
2025	『新建築』創刊		
2026	『新建築』創刊		
2027	『新建築』創刊		
2028	『新建築』創刊		
2029	『新建築』創刊		
2030	『新建築』創刊		

分離派の背景:ゼムパー/ヴァーグナー/分離派建築会

年次	ゼムパー関係	ヴァーグナー関係	分離派建築会関係
1910	ゼムパー建築		
1911	1910年刊『建築』		
1912	イノコチヤ・ヨシタツ建築設計へ		
1913	『新建築』創刊		
1914	『新建築』創刊		
1915	『新建築』創刊		
1916	『新建築』創刊		
1917	『新建築』創刊		
1918	『新建築』創刊		
1919	『新建築』創刊		
1920	『新建築』創刊		
1921	『新建築』創刊		
1922	『新建築』創刊		
1923	『新建築』創刊		
1924	『新建築』創刊		
1925	『新建築』創刊		
1926	『新建築』創刊		
1927	『新建築』創刊		
1928	『新建築』創刊		
1929	『新建築』創刊		
1930	『新建築』創刊		
1931	『新建築』創刊		
1932	『新建築』創刊		
1933	『新建築』創刊		
1934	『新建築』創刊		
1935	『新建築』創刊		
1936	『新建築』創刊		
1937	『新建築』創刊		
1938	『新建築』創刊		
1939	『新建築』創刊		
1940	『新建築』創刊		
1941	『新建築』創刊		
1942	『新建築』創刊		
1943	『新建築』創刊		
1944	『新建築』創刊		
1945	『新建築』創刊		
1946	『新建築』創刊		
1947	『新建築』創刊		
1948	『新建築』創刊		
1949	『新建築』創刊		
1950	『新建築』創刊		
1951	『新建築』創刊		
1952	『新建築』創刊		
1953	『新建築』創刊		
1954	『新建築』創刊		
1955	『新建築』創刊		
1956	『新建築』創刊		
1957	『新建築』創刊		
1958	『新建築』創刊		
1959	『新建築』創刊		
1960	『新建築』創刊		
1961	『新建築』創刊		
1962	『新建築』創刊		
1963	『新建築』創刊		
1964	『新建築』創刊		
1965	『新建築』創刊		
1966	『新建築』創刊		
1967	『新建築』創刊		
1968	『新建築』創刊		
1969	『新建築』創刊		
1970	『新建築』創刊		
1971	『新建築』創刊		
1972	『新建築』創刊		
1973	『新建築』創刊		
1974	『新建築』創刊		
1975	『新建築』創刊		
1976	『新建築』創刊		
1977	『新建築』創刊		
1978	『新建築』創刊		
1979	『新建築』創刊		
1980	『新建築』創刊		
1981	『新建築』創刊		
1982	『新建築』創刊		
1983	『新建築』創刊		
1984	『新建築』創刊		
1985	『新建築』創刊		
1986	『新建築』創刊		
1987	『新建築』創刊		
1988	『新建築』創刊		
1989	『新建築』創刊		
1990	『新建築』創刊		
1991	『新建築』創刊		
1992	『新建築』創刊		
1993	『新建築』創刊		
1994	『新建築』創刊		
1995	『新建築』創刊		
1996	『新建築』創刊		
1997	『新建築』創刊		
1998	『新建築』創刊		
1999	『新建築』創刊		
2000	『新建築』創刊		
2001	『新建築』創刊		
2002	『新建築』創刊		
2003	『新建築』創刊		
2004	『新建築』創刊		
2005	『新建築』創刊		
2006	『新建築』創刊		
2007	『新建築』創刊		
2008	『新建築』創刊		
2009	『新建築』創刊		
2010	『新建築』創刊		
2011	『新建築』創刊		
2012	『新建築』創刊		
2013	『新建築』創刊		
2014	『新建築』創刊		
2015	『新建築』創刊		
2016	『新建築』創刊		
2017	『新建築』創刊		
2018	『新建築』創刊		
2019	『新建築』創刊		
2020	『新建築』創刊		
2021	『新建築』創刊		
2022	『新建築』創刊		
2023	『新建築』創刊		
2024	『新建築』創刊		
2025	『新建築』創刊		
2026	『新建築』創刊		
2027	『新建築』創刊		
2028	『新建築』創刊		
2029	『新建築』創刊		
2030	『新建築』創刊		



佐藤 功一「セセッション式建築」

1. セセッション式:「オーストリアのセセッション」
「セセッション式が所謂現代科学の進歩に伴って生じた思想より出て居ると云う点に於て、真実を表現して居る様式でなければならぬ訳である。」 構造・材料の合理性を示す例としてヴァーグナー建築の紙留めの外装をあげている。
2. セセッション風:「吾々の呼びならわして居るセセッション」
直線的なところが比較的少ない所謂ドイツのセセッション
3. セセッションの手法:「現代的のトリートメント」



岡田 信一郎「中形の浴衣とライスカレイ」

「日本建築家はセセッション其他の近代傾向の根本精神である実用、構造、材料の各方面に合理的であると言う事を精神として極めて自由な広い意味で古来の各様式を材料として新意匠を練る可きである。徒に塊独セセッションの皮層を模して四角や、お飾りの布置にのみ醜態して薄っぺらなものを建てて喜んで居るのは自ら自由なるセセッションニストの位置を擲つものであらう。」

岡田 信一郎「建築と現代思潮」(『建築雑誌』1910(M43)年4月)
科学的態度に基づく合理的建築を求めながら、セセッションの精神は等閑にできないとしていた。

岡田 信一郎「セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル」(『学生』1914(T3)年9月)
岡田 信一郎「オットー・ワグネル」(『現代建築』1914(T3)年12月創刊号から3号にわたって連載)
「新時代に適合すべき真の建築は此の如きものであると呼び、セセッションの気運を促進したのは、此小書(『近代建築』)に於てである。」「彼の意匠になる此等の建築物は、何れも前掲の其新建築に対する所説を体現して居る。即ち近代の実生活に遺憾なく適合して其用途を充たして、且つ近代精神を表現せんとして居る。而して旧建築の模倣をさげ細かい部分までも過去建築の伝習を全然排除し、建築家の考案力を十分に發揮して、其構造の目的に適う材料を有の儘に使用して、材料の性質と構造法とから、自由に新しい形状・装飾を案出しようとした。」

ヴァーグナー『近代建築』で展開された理論は概ね理解されていた?

分離派の背景:ゼムパー/ヴァーグナー/分離派建築会

年次	ゼムパー関係	ヴァーグナー関係	分離派建築会関係
1910	ゼムパー建築		
1911	1910年刊『建築』		
1912	イノコチヤ・ヨシタツ建築設計へ		
1913	『新建築』創刊		
1914	『新建築』創刊		
1915	『新建築』創刊		
1916	『新建築』創刊		
1917	『新建築』創刊		
1918	『新建築』創刊		
1919	『新建築』創刊		
1920	『新建築』創刊		
1921	『新建築』創刊		
1922	『新建築』創刊		
1923	『新建築』創刊		
1924	『新建築』創刊		
1925	『新建築』創刊		
1926	『新建築』創刊		
1927	『新建築』創刊		
1928	『新建築』創刊		
1929	『新建築』創刊		
1930	『新建築』創刊		
1931	『新建築』創刊		
1932	『新建築』創刊		
1933	『新建築』創刊		
1934	『新建築』創刊		
1935	『新建築』創刊		
1936	『新建築』創刊		
1937	『新建築』創刊		
1938	『新建築』創刊		
1939	『新建築』創刊		
1940	『新建築』創刊		
1941	『新建築』創刊		
1942	『新建築』創刊		
1943	『新建築』創刊		
1944	『新建築』創刊		
1945	『新建築』創刊		
1946	『新建築』創刊		
1947	『新建築』創刊		
1948	『新建築』創刊		
1949	『新建築』創刊		
1950	『新建築』創刊		
1951	『新建築』創刊		
1952	『新建築』創刊		
1953	『新建築』創刊		
1954	『新建築』創刊		
1955	『新建築』創刊		
1956	『新建築』創刊		
1957	『新建築』創刊		
1958	『新建築』創刊		
1959	『新建築』創刊		
1960	『新建築』創刊		
1961	『新建築』創刊		
1962	『新建築』創刊		
1963	『新建築』創刊		
1964	『新建築』創刊		
1965	『新建築』創刊		
1966	『新建築』創刊		
1967	『新建築』創刊		
1968	『新建築』創刊		
1969	『新建築』創刊		
1970	『新建築』創刊		
1971	『新建築』創刊		
1972	『新建築』創刊		
1973	『新建築』創刊		
1974	『新建築』創刊		
1975	『新建築』創刊		
1976	『新建築』創刊		
1977	『新建築』創刊		
1978	『新建築』創刊		
1979	『新建築』創刊		
1980	『新建築』創刊		
1981	『新建築』創刊		
1982	『新建築』創刊		
1983	『新建築』創刊		
1984	『新建築』創刊		
1985	『新建築』創刊		
1986	『新建築』創刊		
1987	『新建築』創刊		
1988	『新建築』創刊		
1989	『新建築』創刊		
1990	『新建築』創刊		
1991	『新建築』創刊		
1992	『新建築』創刊		
1993	『新建築』創刊		
1994	『新建築』創刊		
1995	『新建築』創刊		
1996	『新建築』創刊		

ヴァーグナー『近代建築』におけるゼムパーへの言及

【建築家】

「たとえば建築家の金銭的報酬が残念ながら一般に施しに等しく、そして世間は、今後ともこれまでのように、たとえゴットフリート・ゼムパーが生産俊約に俊約を重ねたに残せるであろうほどのものを一人の歌姫の1時間の歌に与えることを好むとしても。」

「たとえば、ハンス・マカルトは学んで得た知識より生まれ持った能力を多くもっていたが、ゴットフリート・ゼムパーには明らかに反対の関係が現われている。建築家には、多くの場合、莫大な学習材料を習得しなければならないという制約から、ゼムパーのような関係が著しく見られる。」

「ブラマンテ10歳、サンツヴィーグ9歳、ミケランジェロ89歳、マデルナ83歳、ペルニニ291歳、ジョーンズ80歳、クランツェ80歳、ゼムパー16歳、ガルニエ73歳、等々」

【様式】

なし

【構成】

「ウィーンに建設中の王宮の中央の建物からマリア・テレジア広場への眺めは、ゼムパーの設計による後方を塞ぐ建物で完成し、古い城門が撤去されれば、効果、見せ場の用意、よく考量された輪郭、シルエット作り、視線を停める点などにおいておそらく比類のないものになりうるであろう。」

【構造】

「この『**芸術を支配するものは必要のみ**』という真理にわれわれの注意を最初に向けさせたのは他ならぬゴットフリート・ゼムパーであり(残念ながら彼は後にわき道に逸れたが)、このことだけで、彼は、すでにかなり明らかにわれわれに進むべき道を示していた。」

「ゼムパーがその著『様式』によって、確かに少し外国風なやり方ではあるが、われわれの注意をこの『**新しい目的が新しい構造を、そしてそれゆえにまた新しい形を生み出さなければならない**』という公準に向けさせたことは、異論なく彼の功績である。しかし、彼はダーウィンのように自分の理論を徹底的に一貫させる勇気をもたず、構造そのものを建築芸術の原細胞と見ないで、それを象徴的に扱うことで済ませていた。」※オットー・ヴァーグナー『近代建築』樋口・佐久間訳、中央公論美術出版

ヴァーグナーの基本思想

【構造】

「この『**芸術を支配するものは必要のみ**』という真理にわれわれの注意を最初に向けさせたのは他ならぬゴットフリート・ゼムパーであり(残念ながら彼は後にわき道に逸れたが)、このことだけで、彼は、すでにかなり明らかにわれわれに進むべき道を示していた。」

「ゼムパーがその著『様式』によって、確かに少し外国風なやり方ではあるが、われわれの注意をこの『**新しい目的が新しい構造を、そしてそれゆえにまた新しい形を生み出さなければならない**』という公準に向けさせたことは、異論なく彼の功績である。しかし、彼はダーウィンのように自分の理論を徹底的に一貫させる勇気をもたず、構造そのものを建築芸術の原細胞と見ないで、それを象徴的に扱うことで済ませていた。」



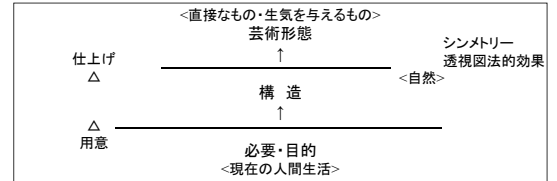
ヴァーグナーの基本思想

「建築芸術は、現在の人間の生活と必要に根ざさなければ、直接なもので、生気を与えるもの、新鮮にするものを欠くことになり、苦しい迷いの状態に沈み込んで、まさに芸術ではなくなるであろう。」

「まず効用が用意をし、続いてそれを芸術が仕上げる」

「あらゆる構造の原思考は、しかし、計算の展開、静力学的な計算に求めるべきでなく、ある自然な創意に求めるべきであり、それは何か発明されるものである。この最後の面から、構造は、芸術の領域に参入する。」

「実際のでないものは美しくない」「建築芸術につねに伴なう厳肅さや品位はシンメトリーを必要とする。」「構成を行う建築家はパースペクティブの効果に大いに重きを置かなければならない。」

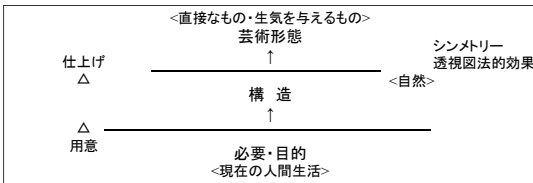


ゼムパーからヴァーグナーへ

【構造】

「この『**芸術を支配するものは必要のみ**』という真理にわれわれの注意を最初に向けさせたのは他ならぬゴットフリート・ゼムパーであり(残念ながら彼は後にわき道に逸れたが)、このことだけで、彼は、すでにかなり明らかにわれわれに進むべき道を示していた。」

「ゼムパーがその著『様式』によって、確かに少し外国風なやり方ではあるが、われわれの注意をこの『**新しい目的が新しい構造を、そしてそれゆえにまた新しい形を生み出さなければならない**』という公準に向けさせたことは、異論なく彼の功績である。しかし、彼はダーウィンのように自分の理論を徹底的に一貫させる勇気をもたず、構造そのものを建築芸術の原細胞と見ないで、それを象徴的に扱うことで済ませていた。」



『様式』におけるゼムパーの建築観と被覆論の位置

A. 『様式』序論と冒頭の短いふたつの章で集中的に提示される建築観

1. organischな自然、形式から論じたアントロポモルフィックな建築観
2. praktischな工芸、機能から論じた唯物主義的な建築観

B. 『様式』各章(第3~11章)で散発的に展開される、象徴をめぐる被覆論

「自然を原型とするorganischな形式の問題」と「技術に即したpraktischな形態化の問題」とを繋ぐ

芸術的建築形式の規範としての自然

A-1. organischな自然、形式から論じたアントロポモルフィックな建築観

1. リズム・シンメトリー : 律動・相称 : 鉱物
- + 2. プロポーション : 比例・均衡 : 植物
- + 3. ディレクション : 方向・軸 : 動物
- + 4. コンテンツ Inhalt : 内容・目的 : 人間

進化論的に把握された生物としての人間をベースにしたアントロポモルフィズム

建築芸術の起源としての工芸

A-2. praktischな工芸、機能から論じた唯物主義的な建築観

建築の四要素 炉 囲い 屋根 基壇
技術の協働としての建築術 陶工術 織工術 木工術 石工術

「技術的所産は目的と材料の結果」[SS1:7-8]

$Y=F(x,y,z,\dots)$: 様式創造の定式

使用目的 : 人間の普遍的必要 形式的・美的考察 (F)

素材・技術 : 時代や民族に左右 様式的考察 (x,y,z,\dots)

工芸に建築芸術の起源を見て取り、様式創造の定式に即して(普遍的な使用目的から導かれた理論的形式と、それに応じる素材と技術とに即して)、建築的・工芸的形式が生成展開すると捉えた。

A-1「自然を原型とするorganischな形式の問題」と
A-2「技術に即したpraktischな形態化の問題」とを繋ぐ
B. ゼムパーの被覆論

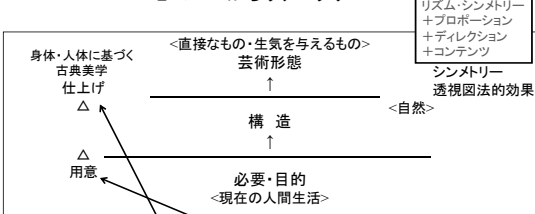
「織工術と陶工術という両技芸のうち、またしても織工術が、無条件の優先権を有する。というのも、織工術は、いわば原芸術と認められるからである。陶工術も含めて、ほかのあらゆる技芸が、それぞれの型と象徴とを織工術から借用したのに対して、**織工術自体は、この点で全く自立しているように見え、その型を自ら形成している、ないしは、直接自然から借りているのである。**」
[SS1:13]

織工術(被覆に繋がる技術)と自然との緊密な関係
↓
自然と技術とを結びつける被覆の象徴作用

第一段階: 技術に即したpraktischな**形態化の段階**

第二段階: 被覆の象徴作用によって、技術に即したpraktischな形式を自然を原型とするorganischな形式へと変容させると同時に形式を精神化する、いわば**芸術化の段階**

ゼムパーからヴァーグナーへ



第一段階: 技術に即したpraktischな**形態化の段階**

第二段階: 被覆の象徴作用によって、技術に即したpraktischな形式を自然を原型とするorganischな形式へと変容させると同時に形式を精神化する、いわば**芸術化の段階**

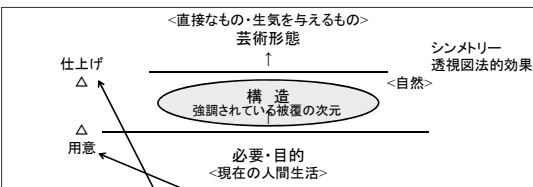
ヴァーグナーの被覆観につながる言説

【構造】

「自分の創造する芸術形態に構造を明らかに示すだけでなく、見る人に、使用材料と工事期間が正しく表現されていることを確信させなければならない。この種の間違いは残念ながら多すぎる。工事期間が効果や施工材料と対応しない芸術形態には、つねに多少の嘘や苦痛がある。何も支えない持ち送りや受け石、石を刻んだ形を見せる鉄製の建物、完全な石造に見せる漆喰塗りの家、そのもの以上に見せようとする数々の外部詳細、その他多くのものがこの部類に入る。」
被覆の倫理的明示

「建物の外装に板石を使う。それらの板石は、立積が非常に小さくすみ、その代り、高貴な材料で計画することができる。それらの板石は、青銅の額によって取り付ける。……石の立積は前の例(ルネサンスの建築方法)の1/8から1/10になり、部材の数は減り、高貴な材料によって記念的な効果は高まり、使われる資金は恐ろしく少なくなり、工事期間は普通の、正常な、望みの長さに短縮される。近代の建築方法には、このような場合に選ぶための利点は確かに十分ある。しかし、それで利点のすべてが言いつくされたわけではなく、最大の利点は、そのような方法が幾つかの新しい芸術的なモチーフを生み出すことにあり、それらのモチーフを発展させることが芸術家に大いに望まれるだけでなく、芸術の中に真実を形成し続けるために、芸術家はそれらのモチーフを急いで熱心に捕らえなければならない。」
被覆の効用性

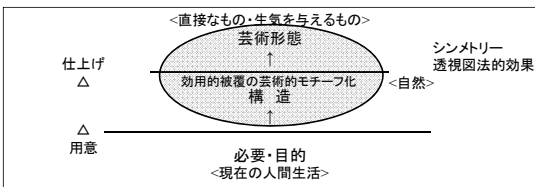
ヴァーグナーの被覆観につながる言説



第一段階: 技術に即したpraktischな**形態化の段階**

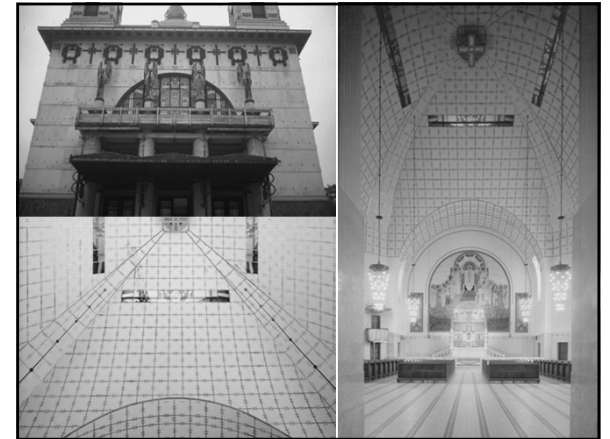
第二段階: 被覆の象徴作用によって、技術に即したpraktischな形式を自然を原型とするorganischな形式へと変容させると同時に形式を精神化する、いわば**芸術化の段階**

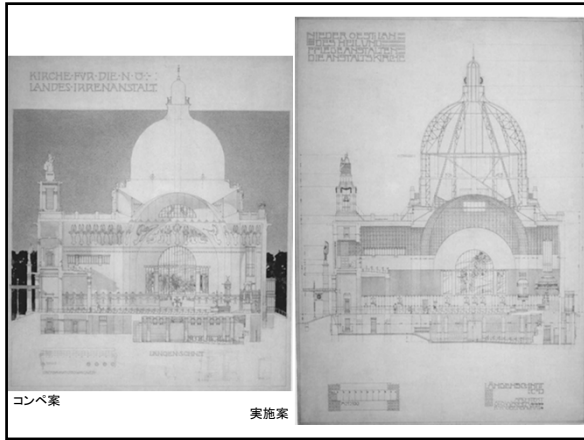
ヴァーグナーの被覆観につながる言説



「建物の外装に板石を使う。それらの板石は、立積が非常に小さくすみ、その代り、高貴な材料で計画することができる。それらの板石は、青銅の額によって取り付ける。……石の立積は前の例(ルネサンスの建築方法)の1/8から1/10になり、部材の数は減り、高貴な材料によって記念的な効果は高まり、使われる資金は恐ろしく少なくなり、工事期間は普通の、正常な、望みの長さに短縮される。近代の建築方法には、このような場合に選ぶための利点は確かに十分ある。しかし、それで利点のすべてが言いつくされたわけではなく、最大の利点は、そのような方法が幾つかの新しい芸術的なモチーフを生み出すことにあり、それらのモチーフを発展させることが芸術家に大いに望まれるだけでなく、芸術の中に真実を形成し続けるために、芸術家はそれらのモチーフを急いで熱心に捕らえなければならない。」
被覆の芸術的モチーフ化(※被覆論のような論理次)







分離派の背景:ゼムパー／ヴァーグナー／分離派建築会

年	ゼムパー関係	ヴァーグナー関係	分離派建築会関係
1912			
1913			
1914			
1915			
1916			
1917			
1918			
1919			
1920			
1921			
1922			
1923			
1924			
1925			
1926			
1927			
1928			
1929			
1930			
1931			
1932			
1933			
1934			
1935			
1936			
1937			
1938			
1939			
1940			
1941			
1942			
1943			
1944			
1945			
1946			
1947			
1948			
1949			
1950			
1951			
1952			
1953			
1954			
1955			
1956			
1957			
1958			
1959			
1960			
1961			
1962			
1963			
1964			
1965			
1966			
1967			
1968			
1969			
1970			
1971			
1972			
1973			
1974			
1975			
1976			
1977			
1978			
1979			
1980			
1981			
1982			
1983			
1984			
1985			
1986			
1987			
1988			
1989			
1990			
1991			
1992			
1993			
1994			
1995			
1996			
1997			
1998			
1999			
2000			
2001			
2002			
2003			
2004			
2005			
2006			
2007			
2008			
2009			
2010			
2011			
2012			
2013			
2014			
2015			
2016			
2017			
2018			
2019			
2020			
2021			
2022			
2023			
2024			
2025			
2026			
2027			
2028			
2029			
2030			

ヴァーグナーを歴史的にどう位置づけて受容したか

1914 岡田信一郎『セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル』[学生]9月号
 1923 大内秀一郎『欧州近代建築の潮流』
 1924 濱岡周忠編『近代建築思潮』(建築文化叢書)
 1927 岸田日出刀『オットー・ワグナー』
 1928 オットー・ワグナー十年祭記念号『建築新潮』6月号
 1928 岸田日出刀『欧州近代建築史論1-4』[建築雑誌]6-9月号
 1928 石本喜久治、岡田孝男『最近建築様式論』(アルス建築大講座)
 1929 田辺泰『近代建築様式概観』(建築学会パンフレット)

ヴァーグナー理論の位置づけ
 ・ラスキン、モリス アール・ヌーヴォー ヴァーグナー、セセッション 機能主義、構成主義
 自然模倣的 / 自然科学的・唯物主義的 国際主義

・建築に構造の重要なことを説いたのは、ワグナーに始まります。否、**もう少し遅ればゼンペルに行くべきであります。**(石本、岡田『最近建築様式論』[アルス建築大講座]1928-29)

ヴァーグナー作品の位置づけ
 ・シンケル ゼムパー シッカーツブルク、ニウル ヴァーグナー セセッション、ホフマン
 ※ゼムパーのネオ・ルネサンス様式の継承から、その試みまでのスタイルの展開

ヴァーグナーを歴史的にどう位置づけて受容したか

1914 岡田信一郎『セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル』[学生]9月号
 1923 大内秀一郎『欧州近代建築の潮流』
 1924 濱岡周忠編『近代建築思潮』(建築文化叢書)
 1927 岸田日出刀『オットー・ワグナー』
 1928 オットー・ワグナー十年祭記念号『建築新潮』6月号
 1928 岸田日出刀『欧州近代建築史論1-4』[建築雑誌]6-9月号
 1928 石本喜久治、岡田孝男『最近建築様式論』(アルス建築大講座)
 1929 田辺泰『近代建築様式概観』(建築学会パンフレット)

ゼムパーとヴァーグナーの理論的關係を指摘する特例

「ゼムパーは、予言的に、その著書中で次の要求をして居る。曰く、近代的問題の解決は、現代的問題から自由に発展して行くべきものであると、その場合に、恐らく、ゼムパーは、纏った様式的应用と、それ以上の発展とを考へたであらう。19世紀の90年代に、伝統の桎梏から自由となつた芸術が現はれて、新時代的の意味で、ゼムパーの要求を吾人は知るに至つたのである。」

「近代建築の努力に対し、大なる意義があるのは、ウィーンの建築家オットー・ワグネルである。……理論的に彼は、強烈な芸術物質主義を代表している。……直接、構造から発達せしめられた新形式は、真実なもので、自然の法則として考えられねばならないのである。ワグネルの建築にあつては、この強烈な物質主義は少しも適用されていない。……又ゼムパーは、構造と形の調和を要求した。丁度それと同様に、イギリスの理論家ラスキン及びモリスが彼に指図した……」

↓

ゼムパーからヴァーグナーへの技術・芸術一元的把握の系譜に触れるも、その論理には届かず。

ヴァーグナー受容における被覆論不在から見えるもの

1914 岡田信一郎『セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル』[学生]9月号
 1923 大内秀一郎『欧州近代建築の潮流』
 1924 濱岡周忠編『近代建築思潮』(建築文化叢書)
 1927 岸田日出刀『オットー・ワグナー』
 1928 オットー・ワグナー十年祭記念号『建築新潮』6月号
 1928 岸田日出刀『欧州近代建築史論1-4』[建築雑誌]6-9月号
 1928 石本喜久治、岡田孝男『最近建築様式論』(アルス建築大講座)
 1929 田辺泰『近代建築様式概観』(建築学会パンフレット)

セセッションにおける技術・芸術一元論への疑問

「……セセッションの建築観は全然ワグナー的であつたことも頷かれよう。従つて目的の把握と充足、材料の選定、簡潔経済的な構造を目標とした所謂実用様式の建築を意図したものであつた……この運動の主張たる実用と美との一致を目指す一元論は、其後に至つて実用の美と作者の第二義的に陥らざる美意識とを平行させる二元論的な建築観に迄発展しているが、果たしてセセッションの建築が厳正な意味で此の一元論の上のみ成立したものであるか、又実用の美のみが建築美を支配すべきであるかは一は建築歴史上の問題として他は美学上の問題として今後の解決を待たなくてはならない。」

↓

技術・芸術一元的把握の論理不明なまでの疑問

ヴァーグナー受容における被覆論不在から見えるもの

1914 岡田信一郎『セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル』[学生]9月号
 1923 大内秀一郎『欧州近代建築の潮流』
 1924 濱岡周忠編『近代建築思潮』(建築文化叢書)
 1927 岸田日出刀『オットー・ワグナー』
 1928 オットー・ワグナー十年祭記念号『建築新潮』6月号
 1928 岸田日出刀『欧州近代建築史論1-4』[建築雑誌]6-9月号
 1928 石本喜久治、岡田孝男『最近建築様式論』(アルス建築大講座)
 1929 田辺泰『近代建築様式概観』(建築学会パンフレット)

伊東忠太「セセッションの回顧」『建築新潮』オットー・ワグナー十年祭記念号
 「岸田さんはワグナーの作品を見て形を見るな、形を見ると失望するかも知れぬその心を見ろと云うような意味でお話になつたと思うが、私の考へと全く同じであります。ワグナーの作は、ワグナーの心事を見るところに価値があるので、形はどうあつても宜しい、心が分れば即ち建築の心が分れば宜しいのであります。」

岸田日出刀「オットー・ワグナーに就いて」『建築新潮』オットー・ワグナー十年祭記念号
 「ワグナーの作品を見る場合に一寸注意として申したいのは、決してその作品の上から外面的に見てはいかないと云ふ点であります。……現代の世界の新しい建築の異常な発展を見たままの眼でワグナーの作つたものを見ると、多くの人は失望することを私は受け合ひます。ワグナーを見るにはワグナーの本統の偉大さを理解するためには、今から卅年前の人間になり切つて見て初めて理解されるべきであると私は思ひます。」

↓

形を見ること = 形を時代の様式として見ること
 技術・芸術一元的把握の論理(被覆論を捉える眼)不在
 形/心 と 技術/芸術 という二重の二元論